



筑紫女学園大学リポジット

地域の子育て支援活動を通して保育士が感じた難し
さと気づき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大元, 千種, 大鶴, 香, 渋谷, 登美子, 原田, 博子, 森田, 理香, OHMOTO, Chigusa, OZURU, Kaoru, SHIBUTA, Tomiko, HARADA, Hiroko, MORITA, Rika メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/90

地域の子育て支援活動を通して保育士が感じた難しさと気づき

大元 千種・大 鶴 香・渋谷 登美子
原 田 博 子・森 田 理 香

Career Development as Childcare Teachers through Child-Rearing Support Activities

Chigusa OHMOTO, Kaoru OZURU, Tomiko SHIBUTA,
Hiroko HARADA and Rika MORITA

問題と目的

1990年に発表された1989年の合計特殊出生率1.57に代表される少子化問題が引き金となり、政府による子育て支援対策がとられてきた。子育て支援対策は、1995年の“エンゼルプラン”(1995年～1999年)によって本格化され、以来、“新エンゼルプラン”(2000年～2004年)、“子ども・子育て応援プラン”(2005年～2009年)と、3期の政策を経ている。当初は仕事と子育ての両立支援策としての保育政策が中心であったものから次第に拡大され、働き方の見直しと地域の子育て支援、就労支援などが盛り込まれてきた。2003年の児童福祉法の改定により地域子育て支援推進強化事業が実施され、“子ども・子育て応援プラン”では地域の子育て支援の拠点づくりが進められた経緯がある。

地域の子育て支援対策は1993年に保育所地域子育てモデル事業として創設され、1995年の“エンゼルプラン”において保育所を主たる指定施設として展開する地域子育て支援センター事業に名称変更がされたことから明らかなように、保育士に子育て支援の担い手としての役割が求められることになった。一方、2002年に特定の専門機関に依拠せずに創設された集いの広場事業は、2007年に拠点事業としてセンター型、広場型、児童館型に再編されたが、その中でもセンター型事業を担う中心はやはり保育士である。

保育所における保育の対象は子どもたちであるが、地域の子育て支援の対象となるのは主に

親、特に母親たちである。それゆえ保育士が子育て支援の役割を担うにあたっては、意識と行動に大きな変革が求められる。すなわち、子ども理解とその支援だけではなく、社会の状況を踏まえた親理解と支援の手立てが必要となるのである。

少子化が社会問題化した時期に行われた、大阪市の子育て中の母親たちを対象にした意識調査（服部・原田，1991）では、幼い子どもと触れることなく母親となり、孤独な子育てをしている親たちの子育て困難や不安の問題が示された。特に子どもが0歳の時期には虐待の恐れもあるという深刻な子育ての問題が指摘された。その他にも1980年代後半から2000年初頭にかけて、母親の子育て不安や子育て支援の重要性についての報告が多くなされている（あんふあんで，1993；原田，1993；鈴木，1999）。子育て不安のなかでも特に子どもに発達的な遅れや偏りが見られた場合に、親が子どもの対応に困難や将来への不安を感じることが多い。したがって子育て支援に従事する者には、不適切な養育や配慮の必要な子どもへの気づきが必要となる。また、近年では、母親を支援されるだけの受け身の存在として見るのではなく、人間として尊重し平等性の視点から母親のエンパワーメントを子育て支援に内包させていくことの重要性も指摘されてきた（中谷，2008）。さらに、親のメンタルヘルスへのサポートや、家族までも含んだ家族支援の視点と体制が求められている（山縣，2008；亀口，2010a；原，2010；田中，2010）。

このような状況の中、1999年に改定された保育所保育指針においては、“乳幼児の最善の利益”、“地域における子育て支援”、“保育士の専門性”、“虐待などへの対応”など新しい概念や項目が加えられている。さらに保育士養成課程の科目にも“家族援助論”が新設された。すなわち保育士には保育所に在籍している子どもとその保護者だけでなく、地域の子育て中の親や家族への支援までもが求められ、そのための知識や方略が保育士の専門性に含まれるようになったのである。この傾向は2008年改定、告示された保育所保育指針においてさらに強調されている。すなわち、子育て支援に関わる者には親との関係を作り、保育者同士の相互援助、地域の専門機関や関係者との連携などが求められ、親の心をサポートするカウンセリングの理論と技法なども紹介されている。

地域の子育て支援には保育経験を積んだ保育士が当たることが多い。しかし、その多くは保育士養成科目の変更以前に養成された保育士で、親や家庭、地域支援に関する教育を十分に受けていないことが推測されている。そのために、地域子育て支援の従事者に求められる知識や技術と、実際に有する資格や経験とのずれが生じている（橋本・扇田・多田・藤井・西村，2005）。また、地域の子育て支援が多様化しており、それに対応するための保育者の研修や支援体制づくりが追いついていない現状も指摘されている（伴・菅田・増田，2009）。

本研究においては、特別保育事業として位置づけられている地域子育て支援センター事業だけでなく、保育所で実施されている地域の子育て支援活動において、担当する保育士が感じる困難を聞き取りによって調査し、その具体的問題を把握する。さらに、保育士がそれら困難な問題に対して迷いながらも親との関わりを様々に工夫し行うことによって得られた子育て支援の従事者としての気づきや培われたものなど、成長について明らかにする。

方法

1. 研究協力者

F県近郊で地域子育て支援活動を行っている保育士7名に本研究の協力を依頼した。研究協力者の詳細についてはTable 1に示す。実施している子育て支援の形態は、サロン（開催時間内であれば、自由に出入りできる）、遊びの広場（開始時間、終了時間が決まっており、活動プログラムが用意されている）、相談（育児相談、発達相談など）の3つに区分した。

Table 1 研究協力者の概要

氏名	勤務先	性別	保育経験	支援経験	実施している子育て支援		
					サロン	遊びの広場	相談
A保育士	保育所	女	23年	12年	○	○	○
B保育士	保育所	女	27年	8年	—	○	○
C保育士	保育所	女	33年	5年	○	—	○
D保育士	支援センター	女	16年	5年	○	○	○
E保育士	支援センター	女	15年	11年	○	○	○
F保育士	保育所	女	10年	1年	○	○	—
G保育士	支援センター	女	20年	2年	○	○	○

2. 手続き

2011年1月～3月に、同意の得られた研究協力者に対し、子育て支援事業に関して個別に半構造化面接を行った。7名すべて現役の保育士である。ただし、7名中1名には園長が同席したが、分析には担当者の発言のみを対象とした。はじめに保育歴や子育て支援にかかわった年数、子育て支援活動の形態などを所定の質問用紙に記入してもらい、その後、インタビューを行い、内容をICレコーダーに記録した。質問項目については以下の通りである。①子育て支援活動の概要、②子育て支援活動を通して感じる大変さと難しさ、③子育て支援活動を行っている際の工夫や配慮、④子育て支援活動に対して大学が協力できること、⑤子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたものである。研究協力者との自然な会話の流れを重視し、質問の順序は適宜変更した。インタビュー時間は40分から1時間半程度であった。

3. 倫理的配慮

インタビュー開始時に改めて本研究の目的を口頭で説明し、研究協力に同意する署名をもらった。さらにICレコーダーによる音声記録の許可を口頭で得た。

4. 分析方法

I Cレコーダーに記録した研究協力者7名のインタビュー内容を書き起こし、逐語録を作成した。本論文では、②子育て支援事業を通して感じる困難さや大変さと、⑤子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたものについて言及された箇所に対してのみ、K J法（川喜多，1967）を参考にして分析し、報告をする。

まず、②子育て支援の大変さと困難さに言及している部分を文章単位で抽出し、要約を行った（コード化）。その際、調査者による解釈が入らないようにできるだけ研究協力者が用いた言葉を使用し、また研究協力者についてのサンプルコードを付した。得られたコードを比較し、意味が似ているものをまとめてカテゴリー化を行った（サブカテゴリー化）。さらにサブカテゴリー間の関係を検討し、同様の意味内容のものについてはさらにカテゴリー化を行い、上位カテゴリーを作成した（Table 2）。

コード化とカテゴリー化は5人の調査者で行った。コード化とカテゴリー化が一致しない場合は、抽出された文章の文脈を検討し、協議の上、決定した。⑤子育て支援によって培われたものについても、同様の手順で分析を行い、Table 3を作成した。

結果

1. 子育て支援事業を通して感じる大変さと困難さのカテゴリー

子育て支援の大変さと困難さについての27のコードから、7つのカテゴリーと11のサブカテゴリーを生成した。本文中では、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、コードを「 」、発言の一部を「 」斜体で表した。

カテゴリー《集団の雰囲気作り》は、〈場に馴染んでもらうための配慮〉、〈集団を活性化することの難しさ〉、〈初対面での関わりの難しさ〉の3つのサブカテゴリーから構成されており、研究協力者である7名の保育者のうち5名がこのカテゴリーに含まれるコードを産出していた。〈場に馴染んでもらうための配慮〉は、全く話をしなかつたり居づらそうにしてすぐ出て行くこともある「父親への配慮」と、なかなか周囲に溶け込めなかつたり、来たら疲れるという「集団に馴染めない親への対応」という2つのコードから構成された。〈集団を活性化することの難しさ〉は、親も子どももみんなに楽しんでもらえるような雰囲気を作り出すことの難しさである。〈初対面での関わりの難しさ〉は、2名のコードから構成されており、共に「踏み込んでいいのかい、性格も分からない」という初対面の状況で、「次に来て欲しいと思うので、・・・お母さんとの会話は気を遣いますね」と語っていた。

《継続した関係作り》は、〈継続して来てもらうことの難しさ〉と〈相手に合わせた関係作り〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈継続して来てもらうことの難しさ〉は、「一期一会」という言葉で表されていたが、継続して来てくれるかどうかは親次第という子育て支援の現場の特徴に関わるものである。〈相手に合わせた関係作り〉は、「お子さんとお母さんの状態が様々」な集団の中で「相手に合わせた関係作り」をすることの難しさとし、「月に1回程度で親子との信

Table 2 子育て支援活動を通して感じる大変さと困難さのカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	5年以上	3年未満
集団の雰囲気作り	集団を活性化することの難しさ	集団を活性化することの難しさ	○	
		父親への配慮	○	
	場に馴染んでもらうための配慮	集団に馴染めない親への配慮	○	
	初対面での関わりの難しさ	次に来てもらうための初対面での関わりの難しさ	○	○
継続した関係作り	継続して来てもらうことの難しさ	継続して来てもらうことの難しさ	○	
		相手に合わせた関係作り	○	
	相手に合わせた関係作り	月に1回程度で親子との信頼関係を築くことの難しさ	○	
支援者としての態度・言動	助言することの難しさ	回数が少ない中で助言することの難しさ	○	○
		子どもの姿を把握できないまま、親の話を聞いたり助言したりすることの難しさ	○	
	支援者としての言動についての不安	相談における自分の技能に関する不安	○	
		自分の言動が親にどうとらえられるかという不安	○	
特別な配慮が必要な子どもへの対応	気になる子どもへの理解と配慮	特別な支援が必要な子どもへの配慮	○	
		気になる子どもの把握と配慮	○	
	親への伝え方	子どもが気になる場合どう伝えるか	○	
特別な配慮が必要な親への対応		子どもに目が向かない親への対応	○	
		難しい親への対応	○	
		個別での支援が望ましいが集団で行うことの難しさ	○	
子育て支援に対する迷い	子育て支援とは何か	子育て支援は何かという迷い		○
		子どもや親への対応の指針がない	○	
	支援者としてのモチベーションの差	支援者のモチベーションの差	○	
地域全体での支援システムの不備		支援の場に参加しない親への支援の難しさ	○	
		親子を支援するための地域でのシステムが整っていない	○	

「関係構築の難しさ」から構成された。

《支援者としての態度・言動》は、〈助言することの難しさ〉と〈支援者としての言動についての不安〉のサブカテゴリーから構成された。〈助言することの難しさ〉は、「回数が少ない中で助言することの難しさ」と「子どもの姿を把握できないまま、親の話を聞いたり、助言したりすることの難しさ」であった。〈支援者としての言動についての不安〉は、「相談における自分の技能に関する不安」と「自分の言動が親にどうとらえられるかという不安」であった。

《特別な配慮が必要な子どもへの対応》は、〈気になる子どもへの理解と配慮〉と〈親への伝え方〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈気になる子どもへの理解と配慮〉は、音や声に

過敏な「特別な支援が必要な子どもへの配慮」と継続して関わっていくことができない中での「気になる子どもの把握と配慮」であり、〈親への伝え方〉は「子どもが気になる場合どう伝えるか」であった。

《特別な配慮が必要な親への対応》は、子どもと一緒にいても「子どもに目が向かない親への対応」と、人の話を聴かない親や精神疾患をもつ親など「難しい親への対応」、そして「個別での支援が望ましいが集団で行うことの難しさ」の3つのコードから構成された。

《子育て支援に対する迷い》は、〈子育て支援とは何か〉と〈支援者としてのモチベーションの差〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈子育て支援とは何か〉は、「支援って何だろうと思うことはいっぱいありますよね」という発言に象徴される「子育て支援は何かという迷い」と「子どもや親への対応の指針がない」というコードから構成され、前者は子育て支援歴3年未満の保育士から、後者は子育て支援歴5年以上の保育士から産出された。〈支援者としてのモチベーションの差〉は、子育て支援が行政からのかけ声でスタートしたことによる個々の「支援者のモチベーションの差」である。《地域全体での支援システムの不備》は、「支援の場に参加しない親への支援の難しさ」と「親子を支援するための地域でのシステムが整っていない」の2つのコードから構成された。子育て支援活動を通して感じる困難さと大変さのカテゴリーを図示したものがFigure 1である。

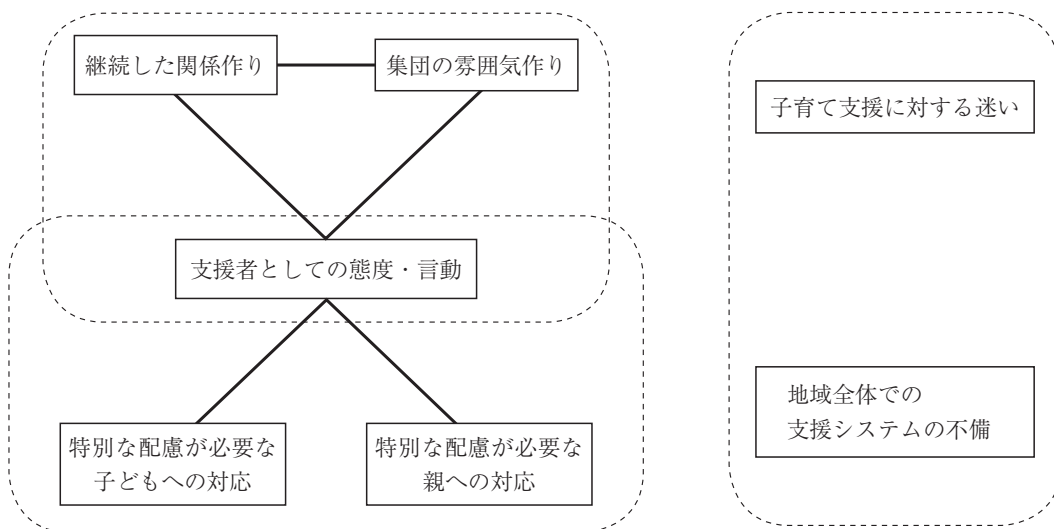


Figure 1 子育て支援事業を通して感じる困難さと大変さのカテゴリー間の関連

2. 子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたもののカテゴリー

子育て支援を通して新たに気づいたことや培われたものについての11のコードから、6つのサブカテゴリーと3つのカテゴリーを生成した（Table 3）。カテゴリー《支援者としてのコミュニケーション能力》は、〈親に対する具体的態度〉と〈相手の親に合わせたやりとり〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈親に対する具体的態度〉は、親とのコミュニケーションにお

ける「支援者としての言葉づかい・話し方」と「支援者の笑顔の大切さ」という具体的な態度のコードからなり、子育て支援歴3年未満の保育士から産出された。〈相手の親に合わせたやりとり〉は、「初対面の母親とのコミュニケーション」や「関係作りのためのコミュニケーション」、「結論を先に出さずに気長に話を聞く」など相手に合わせた関係づくりのコミュニケーションに関するコードからなり、子育て支援歴5年以上の保育士から産出された。

《子育て支援への理解》は、〈多様な支援への気づき〉と〈子育て支援についての理解の広がり〉の2つのサブカテゴリーから構成された。子育て支援に直接関わることによって「対象者に応じた多様な子育て支援とその大切さ」に気づき、さらに「前は何となくは分かっていたんだけど、本当の意味ではわかっていなかった。親と子、両方をきちんと支え、さらに地域もまとめてという考え方になってから、(子育て)支援についてもっと興味がでた」という子育て支援歴5年以上の保育士の発言に表されているように、子育て支援についての理解が広がっていた。

《親に対する理解》は、〈家庭保育の親の悩みへの気づき〉と〈親に対する理解の深まり〉の2つのサブカテゴリーから構成された。〈家庭保育の親の悩みへの気づき〉のサブカテゴリーは、支援者として働いていない親と初めて関わった経験から気づいた「家庭保育の親の子育ての悩み」というコードから構成され、子育て支援歴3年未満の保育士から産出された。〈親に対する理解の深まり〉には「家庭保育の母親の考え方に対する気づき」というコードと、「親子をセットでみることによる親理解の深まり」という子育て支援の場で親と子どものやりとりを直接見ることによって、親の態度に対する理解が深まったというコードから構成され、子育て支援歴5年以上の保育士から産出された。子育て支援を通して気づいたことや培われたもののカテゴリーを図示したものがFigure 2である。

Table 3 子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたもののカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	5年以上	3年未満
支援者としてのコミュニケーション能力	親に対する具体的態度	支援者としての言葉づかい・話し方		○
		支援者の笑顔の大切さ		○
	相手の親に合わせたやりとり	初対面の母親とのコミュニケーション	○	
		関係作りのためのコミュニケーション	○	
		結論を先に出さずに気長に話を聞く	○	
子育て支援への理解	多様な支援への気づき	対象者に応じた多様な子育て支援とその大切さ		○
	子育て支援についての理解の広がり	子育て支援の利用者が1年ごとに変わる	○	
		子育て支援についての理解の広がり	○	
親に対する理解	家庭保育の親の悩みへの気づき	家庭保育の親の子育ての悩み		○
	親に対する理解の深まり	家庭保育の母親の考え方に対する気づき	○	
		親子をセットでみることによる親理解の深まり	○	

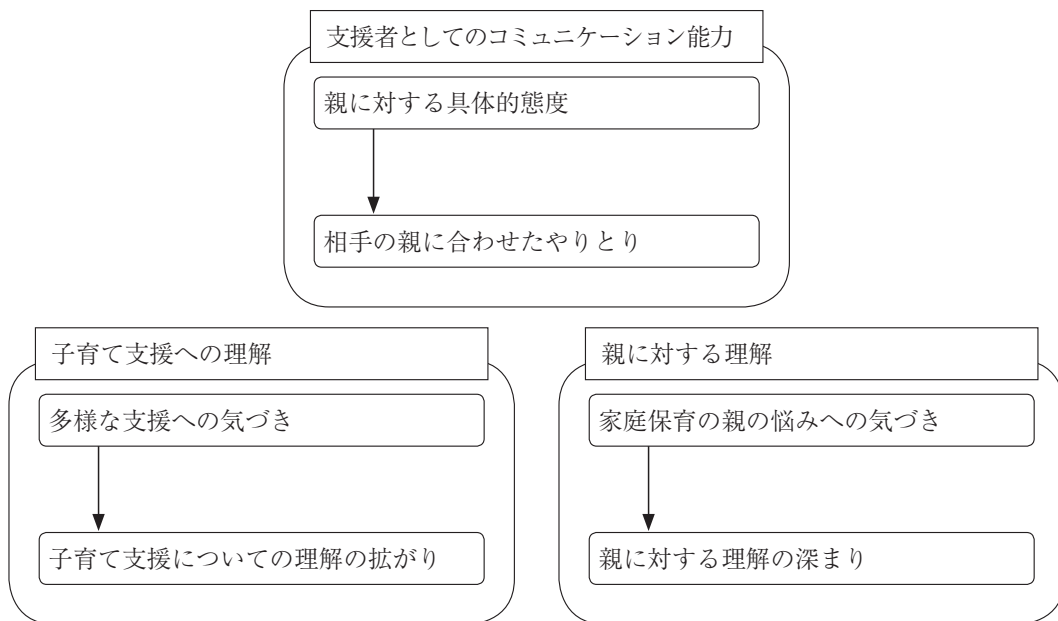


Figure 2 子育て支援活動を通して新たに気づいたことや培われたもののカテゴリー内におけるサブカテゴリー間の関連

考察

1. 保育士が地域の子育て支援活動を通して感じた大変さと難しさについて

子育て支援の大変さと難しさについて、(1) 継続的に参加してもらうための働きかけ、(2) 特別な配慮が必要な子どもへの対応、(3) 特別な配慮が必要な親への対応、(4) 支援者としての態度・言動、(5) 子育て支援に対する迷いの5つの観点から考察を行う。7つのカテゴリー (Table 2) のうち、《集団の雰囲気作り》、《継続した関係作り》を (1) にまとめ、子育て支援に対する迷い、地域全体での支援システムの不備を (5) にまとめて考察した。

(1) 継続的に参加してもらうための働きかけ

保育士は、集団の雰囲気作りや継続した関係作りに大変さと難しさを感じている。これは地域の子育て支援活動という場の特徴が大きく関わっていることによるといえる。今回調査の対象とした子育て支援活動は、在宅の乳幼児と親を対象として地域に開かれたものであり、参加は親の意思による。そのため、一度参加した親子が継続的に参加するという保障はない。保育所では保育の対象児が固定されており、しかもほぼ毎日来所するという長期的な見通しを持って関わることができる。しかし、子育て支援の場所では親の自由意思に任されているため、参加が継続しないということもありうる。特に支援が必要な親子には長期的に関わる必要があるため、継続的に来てもらうためにどうすればよいかということに難しさを抱えていると考えられる。そのために具体的には集団を活性化することや、場に馴染んでもらうための配慮をするなど居心地のよい空間を作ろうとしている。さらに個人に対しても相手に合わせて関わり、その関係性が続く

ように努力しているが、そのことに難しさを感じていると考えられる。保育所等での長期的な展望を持った関係作りではなく、その瞬間の関係を大事にしながら積み重ねていくという関係作りに難しさを感じているといえる。

（２）特別な配慮が必要な子どもへの対応

地域に開かれた子育て支援活動では、地域の親子を対象としているため、誰もが参加できる形となっている場合が多い。その中には発達的な偏りや遅れを持つ子どもや心理的な不安定さを抱えている子ども、行動上の難しさを持つ子どももいる。保育士がそのような気になる子どもをどうとらえるのか、どう配慮するのか、さらには子どものことをどう親へ伝えていくのかについて難しさを感じている。子育て支援活動の場の特徴として、会う回数が少なく、一緒にいる時間も短いということがある。また、参加している子どもが乳幼児のため、発達的な変化も大きい。さらに保育所や相談機関と違い、子どもの生育歴や背景など情報がない場合がほとんどである。そのため、何らかの気になることがあっても、その子をどのように判断し、どのような配慮をするべきなのか、非常に迷うのであろう。その上、その子の状況を親がどうとらえているのかもわからないなかで対応しなければならない。今回調査した子育て支援の場は保育士が支援者となっており、多職種でスタッフが構成されているところはなかった。子どもの状態をより細かく判断する際に保育士の専門性だけでは難しいことが考えられる。しかし、保育士が中心となって行っている子育て支援活動と他の地域資源との連携は密とは言えず、連携が乏しい場合も少なくないであろう。子育て全般を考えた地域のシステムを作っていく連携していくことが必要である。

（３）特別な配慮が必要な親への支援

保育士は通常の保育所における業務においても親と関わるが、多くの場合は子どもを通して親と関わるが多い。しかし、子育て支援活動の場では、親が直接の支援対象となる。保育士は子どもへの対応や育児を支える知識は豊富にあり、それらに関する相談には専門性を持って対応できると考えるが、親に対する直接支援の研修の機会は少ない。そのような中で、子どもに目が向かない親への対応、また、精神疾患を持つ親や虐待の疑いがある親への対応も必要となる。

さらに親自身の漠然とした不安や顕在化していない悩みなども取り扱っていかなければならない。本来ならば個別での支援が望ましいが集団でしか対応できない場合もあり、その際に自分がどのように支援していくのかという、支援者としての態度・言動に難しさを感じている。

（４）支援者としての態度・言動

支援者としての態度・言動の内容を細かく見たときに、子育て支援の経験年数が短い保育士は自分が何を助言すればよいかという助言に注目した発言がみられた。しかし、子育て支援の経験年数が長くなると、相談における自分の技能への不安や自分の言動が親にどう受け止められるかといった不安についての発言がみられた。何か言わないといけないという一方向的な関わりから、自分の行動がどのように相手に影響を与えるかという二者の関係の中で相手の受け止め方を想定しながらの関わりに変化している。

子育て支援では親が直接の支援の対象となるため、支援者としてどのように親を支援するのか

という難しさに直面し、そこから子どもを中心とした支援から親と子の両方を支えることへ視点が広がっていると考えられる。

Figure 1 から《支援者としての態度・言動》は《集団の雰囲気作り》、《継続した関係作り》、《特別な配慮が必要な子どもへの対応》、《特別な配慮が必要な親への対応》のすべてと関連していると考えられる。言い換えると、雰囲気作りや関係作り、対応といった難しさの背景には支援者としての自分自身のあり方への問いかけがあり、それらについて深く考える姿がうかがえる。

(5) 子育て支援に対する迷い

子育て支援の経験年数が短い保育士は、子育て支援は何かという迷いを持っていた。経験年数が長い人は子どもや親への対応の指針がないということに難しさを感じていた。保育士が子育て支援を考える際にもそのイメージは様々であり、その活動に対する保育士側のモチベーションも多様である。

子育てとは子どもが生まれてから大人になるまでの長い期間を通したものであり、子育て支援と言っても様々な側面からの支援が考えられる。その中で保育所が主体となっていけることは何なのか、さらには地域での子育て支援ということを考えたときに、他機関との協力は必須であり、その協力の中での担当部分やどのように連携を取っていくのかなど地域全体を含めたシステム作りが今後の課題であると考ええる。

2. 子育て支援を通して新たに気づいたことや培われたもの

子育て支援を通して新たに気づいたことや培われたものについて《支援者としてのコミュニケーション能力》、《子育て支援への理解》、《親に対する理解》の3つのカテゴリーごとに考察を行う。ここでは、支援に関わって3年未満の経験年数が短い保育士と5年以上の経験年数が長い保育士の発言の比較を中心に検討する。

(1) 支援者としてのコミュニケーション能力

3年未満の経験が短い保育士は、自分の中に培われたものとして、言葉遣いや話し方、笑顔の大切さといった親に対する具体的態度をあげている。それらは外からとらえることの出来る支援者としての姿である。しかし5年以上の保育士の発言では、相手に合わせてどう関係を作っていくかということに言及したものが多し。子育て支援の担当となった保育士は初めは自分がどのようにふるまうかということに注意が向きがちであるが、経験を重ねるにつれ、相手にどう合わせていくかということに注意を払うようになるようである。

(2) 子育て支援への理解

3年未満の経験年数が短い保育士は、子育て支援という大きな枠組みについての理解はしていたが、実際に担当になってはじめて対象者に応じた多様な支援があることなど支援の実態について気づいている。経験年数が5年以上の保育士になると、参加者が1年ごとに変わり継続的な支援をしていくことが難しいことや、親も子も両方支えることが子育て支援であると実感している。さらに子育て支援を充実したものにしていくには今後どうしたらよいのかということも含

め、自分の子育て支援活動だけではなく、より広い視点で地域の子育て支援について考えているとしている。

(3) 親に対する理解

保育所で勤務していると、在宅の母親に触れる機会は非常に少なく、家庭保育の親がどのような悩みを抱くのかということを知る機会は少ない。家庭保育の親は時間的に余裕があるため、気持ちに余裕があると考えがちなのではないだろうか。ところが子育て支援をするようになり在宅の親と出会うことによって、支援経験が短い保育士は家庭保育の親が持つ悩みに気づくことができ、さらに支援経験が5年以上の保育士においては家庭保育の親の考え方に気づき、親子を一緒に見ていく視点の重要性を実感しており、親に対する理解がより深くなっている。

3. まとめ

今回調査をした中では、子育て支援を担当している保育士が、支援者として自分がどのような態度や言動をとればよいのか難しさを感じていることが分かった。しかし、その難しさを感じながらも、自分の中で培われたものはコミュニケーション能力であるというように、試行錯誤しながら実践の中で多様なスキルを身につけていることがうかがえた。また、特に関係が継続するかどうかわからない状況の中で、親子に居心地のよい空間を作り、必要な支援が行き届くように力を注いでいることが示された。橋本ら（2005）の調査でも、地域の子育て支援に携わるにあたっては保育士の経験や知識だけで充分というわけではなく、何らかの付加が必要であることが示されていた。保育士自身が子育て支援活動に参加しながら、自分の知識やスキルを磨いていることも事実ではあるが、新たな知識を獲得する場や支援者同士の情報交換の場なども今後必要になると考えられる。

さらに、子育て支援に関わることで子育て支援は親と子の両方を支えることであるという理解は深まるが、一方で子育て支援とは何か、あるいは子育て支援が届きにくい親子をどう支援していくのかといったより広い視点で考えた際の子育て支援の難しさを感じるようになる。保育所保育指針では、保育所は地域に開かれた支援を行うことが求められているが、保育所で行う子育て支援を地域でどのように位置づけ、連携するかといったより広い視点からのシステム作りが必要だと思われる。地域全般の子育て支援システムを構築するためには、保育所が運営する子育て支援活動だけではなく、行政、保健センター、相談機関、医療機関、療育機関、幼稚園、小学校など地域の様々な機関との連携が不可欠である。子どもや親を様々な専門性を持った人が見守り、必要な時にに関わり、子育てという長い道のりを支える地域でのシステムを作っていくことが必要である。

引用・参考文献

あんふあんで（編）（1993）. ひとりで子育てしないで ―グッバイ！母親ストレス― ジャパンマシニスト 伴 碧・菅田貴子・増田貴人（2009）. 青森県における子育て支援の実態と保護者のニーズに関する調査

- (2) 一担当者への質問紙調査をととして— 弘前大学教育学部紀要, 102, 75-85.
- 原 仁 (2010). 家族支援の視点からみた発達障害, 子育て支援と心理臨床, 2, 13-19.
- 原田正文 (1993). 子育てで不安を超えて 朱鷺書房
- 橋本真紀 (2011). 地域を基盤とした子育て支援実践の現状と課題 —地域子育て支援センター型実践の検証から— 社会福祉学, 52, 41-54.
- 橋本真紀・扇田朋子・多田みゆき・藤井豊子・西村真実 (2005). 保育所併設型地域子育て支援センターの現状と課題 —A県下の地域子育て支援センター職員と地域活動事業担当者、保育所保育従事者の比較調査から— 保育学研究, 43, 76-89.
- 石川陽子 (編) (2008). 子育て支援カウンセリング 図書文化
- 亀口憲治 (2010a). 子育ての新たな課題 子育て支援と心理臨床, 1, 10-12.
- 亀口憲治 (2010b). 総論 発達障害の家族支援 子育て支援と心理臨床, 2, 6-12.
- 神田直子・林陽子・一盛久子・大村恵子・伊藤祐子・古川芳子・白幡久美子・土方弘子・布施佐代子・石橋尚子 (2000). 愛知県・岐阜県における地域子育て支援センター事業の実態 (その2) 担当者・併設保育所保育士への質問紙調査の結果から 日本保育学会53回大会発表論文集, 210-211.
- 川喜多二郎 (1967). 発想法 —創造性開発のために— 中公新書
- 小堀智恵子 (2010). 次世代育成支援地域行動計画と保育所 —地域子育て支援事業に見る現状と課題— 佛教大学大学院紀要 社会福祉学研究科編, 38, 1-18.
- 三井 登 (2010). 地域子育て支援センターの意義と課題 —支援者による利用者との関係性の構築を中心に— 帯広大谷短期大学紀要, 47, 21-30.
- 御園愛子 (2010). 保育園と子育て支援センターの現状 子育て支援と心理臨床, 1, 38-42.
- 中谷奈津子 (2008). 地域子育て支援と母親のエンパワーメント 内発的発展の可能性 大学教育出版
- 大場幸夫 (2010). 保育現場の子育て支援 —保育相談の視点から— 子育て支援と心理臨床, 1, 13-18.
- 大元千種・大鶴 香・洪田登美子・原田博子・森田理香 (2010). 大学における地域支援に関する調査報告 —子育て支援と発達支援を中心として— 人間文化研究所年報, 21, 195-208.
- 太田光洋 (2008). 専門家としての保育者集団の発達を支えるもの —地域子育て支援活動の取り組みにみる保育者の相互支援— 保育学研究, 46, 179-188.
- 白井千晶・岡野晶子 (2009). 子育て支援制度と現場 よりよい支援への社会学的考察 新泉社
- 杉山千佳 (2009). はじめよう！子育て支援・次世代育成支援 日本評論社
- 鈴木佐喜子 (1999). 現代の子育て・母子関係と保育 ひとなる書房
- 田中康雄 (2010). 親のメンタルヘルスからみた発達障害子育て支援と心理臨床, 2, 20-26.
- 山縣文治 (編集代表) (2008). 子どもと家族のヘルスケア 元気なところとからだを育む ぎょうせい

付記：本調査研究は、平成22年度筑紫女学園大学特別研究助成による“大学における発達支援、家族支援の意義と課題に関する調査研究（2）”の報告書である。

(おおもと ちぐさ：人間形成専攻 教授)

(おおづる かおる：幼児教育科 准教授)

(しぶた とみこ：人間関係専攻 准教授)

(はらだ ひろこ：幼児教育科 講師)

(もりた りか：人間関係専攻 講師)